

## 大津市制百周年記念特別陳列

## 大津の映画館

—あの頃 みんなが映画の大ファンだった—



二月三日〔火〕→三月一日〔日〕

映画が最初に日本に上陸したのは明治三十年（一八九七）頃です。それ以来、大正から昭和にかけて爆発的に流行し、大衆文化、娯楽の花形として大きな役割を担ったのですが、テレビが普及する昭和四十年代頃から入場者数も下降線をたどるようになりました。大津市では平成六年、教育会館の映画館が閉鎖され、映画全盛期からの常設館は無くなりましたが、近年になり、市民の間でも映画の愛好会が組織され、滋賀会館や大津パルコにシアターがオープンするなど、復興の兆しを見せていますし、無声映画の鑑賞会などもたびたび開かれるようになったのはうれしいことです。

さて本館では平成十年二月、市制一〇〇周年を記念する展覧会の第一弾として特別陳列「大津の映画館」を開催します。今回の展示資料の中核は、市内の熱烈的な映画ファン 昌山秀一氏（故人）の御遺族から提供を受けた映画関係の膨大なコレクションです。

昌山コレクションは、かつて大津にあった映画館のチラシ、プログラム、スチール写真、販売用八ミリフィルム、映画関係図書などからなり、総点数は四千点を越え、目下詳細目録を作成中です。特にチラシやプログラムは大正末年から昭和の戦前にかけての貴重なものばかりです。なかには関東大震災や第二次世界大戦の戦火で、フィルム原板の無くなってしまった貴重な映画のチラシなども含まれています。甚七町の帝国館、石橋町の大黒座、札の辻の大津キネマ、膳所の中央館など、年配の方々にとっては懐かしい映画館名ばかりだと思えます。是非とも博物館に足をお運びいただき、かつての華やかなりし大津の映画文化に、思いを馳せてみられてはどうでしょうか。

## 特別陳列の内容

### ☆全体の構成

特別陳列は、次の各コーナーで構成しています。

- (1) 高山コレクションの全体像
  - (2) 市内の映画館の配置と解説
  - (3) 映画のチラシに見る時代の変遷
  - (4) 大正から戦後、プログラムの移り変わり
  - (5) 嵐寛のチャンバラ映画ポスター
  - (6) 映画館の見える風景（写真パネル）
- 次にコーナーの少し詳しい内容を、適宜抜き出して紹介しましょう。

### ☆映画チラシに見る時代の変遷

ここでは、高山コレクションの特色である膨大な数の映画チラシを時代別、ジャンル別に分類。無声映画からトーキーが登場していく時期、戦争の影が映画にひたひたと及び寄ってくる頃、外国映画の輸入が盛んに行われた時代、尾上松之助（目玉の松ちゃん）、嵐寛、阪妻らチャンバラ大スターが活躍した映画の高揚期などについて紹介します。

写真1は無声からトーキーへの転換の過渡期である昭和七年の日活PCLオールトーキー作品「時の氏神」と「女国定」の宣伝ビラで、甚七町にあった帝国館（現松本二丁目六番付近）で上映されました。伏見直江や夏川静江は、当時の有名な女優。この頃は日本語で「全発声映画」などと呼ばれていました。

次に、映画に戦争の影がおとされていく時期、ロン



写真 1

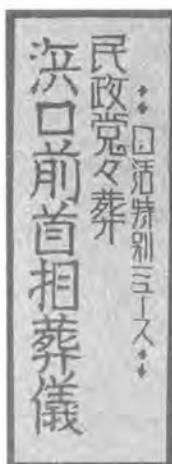


写真 2

ドン軍縮会議の調印で右翼と軍部の反感を買い、東京駅で狙撃された、ときの首相浜口雄幸の葬儀を伝えるニュースが帝国館で流され（写真2）、以降映画界も戦争ものが頻繁に上映されるようになりました。とりわけ「肉弾三勇士」の宣伝が盛んに行われ、大津キネマで上映された「忠烈肉弾三勇士」の映画には「三勇士の母堂を初め家族出演」などのシーンがあったようです（写真3）。肉弾三勇士とは、昭和七年（一九三二）の上海事変で、鉄条網破壊の際に爆死した兵隊のことです。当時軍事美談として盛んに宣伝されました。

また外国映画もかなりの本数が輸入されました。喜劇ではバスター・キートンやハロルド・ロイド、それにチャップリンなどがたびたびスクリーンに登場し、観衆を湧かせましたし（写真4）、ワイズミュラーの「類猿人ターザン」などのターザンものも日本で大ヒットした映画です。

チャンバラ映画は、特に子供たちに大人気でした。

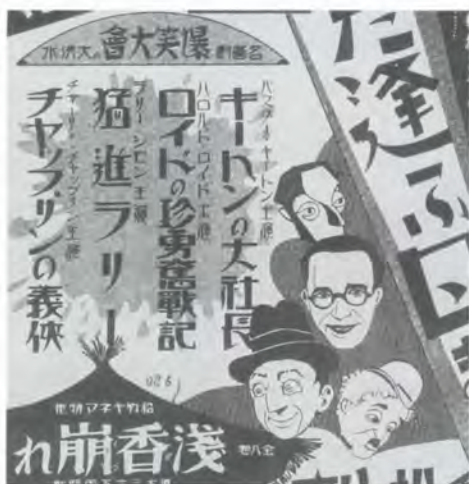


写真 4

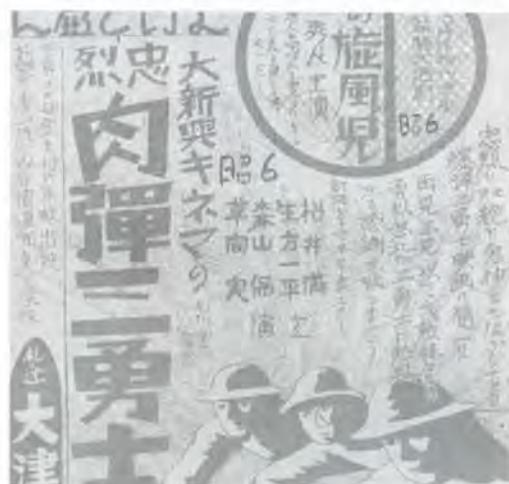


写真 3

演を報じているのも、当時の大衆文化の一断面を今に伝えたものといえるでしょう。

### ☆大正から戦後、プログラムの移り変わり

映画館に入れば、無料で、映画の内容や場面写真を挿入した小型のプログラムが配られていました。今はカラー印刷で紙質も良く、分厚いページものが販売されていますが、昭和の初年は、二つ折り一枚ものか数ページものの、きわめて質素なものでした。

写真5は、丸屋町商店街の映画館・大津新興で戦前に上映された「猛獣使の姉妹」のプログラムで、表裏印刷の二枚折りです。「本物の虎・巨象・猿等々が、スクリーン・パイに暴れ廻る未曾有の大作」という触れ込みでした。

さて、市内の映画館の名前も、配給映画会社の直営



写真 5

となることなどが原因で、たびたび館名が変わっています。左中央の「大津新興」は、丸屋町商店街のもと朝日劇場で、それが昭和七年の大津市・膳所町・石山町の合併による大津市誕生を機会に、新しい館名を募集した結果、松竹座に、さらに大津東劇と名前を変え、昭和十一年頃、新興キネマ（昭和六年に松竹系の会社として設立）の直営となつて、大津新興となったものです。写真5の上段に「大津新興直営開館三周年記念特別大興行」とあるのは、以上の理由からです。館名の変更は他の映画館でも見られました。札の辻の大津キネマも、もとは近江館と呼ばれ、大津キネマの後は大津東宝、大勝館、昭劇と時代を経て閉館になっています。

また映画館のなかには、もともとは芝居小屋から発展したものもありました。大黒座（長等商店街）は、現在のグランドメゾン浜大津の地にあつたものです。もとは明治二十二年（一八八九）、近くの旧小川町で創設された芝居小屋で、後に石橋町に移された由緒深い建物なのです。旧甚七町の帝國館も、明治時代は稲荷座と呼ばれ芝居を打っていました。膳所の中央館（現・膳所二丁目一付近の駐車場）は芝居が主で、よく旅巡業の一座がやってきて興行していたものを、昭和七年頃に映画の上映に乗り出したという歴史を持っています。中央館は戦後直後から戦時中には閉鎖されたようで、今、その存在を知る人も少なくなってきました。

今回の特別陳列では、以上のような映画館の歴史とともに、事前調査の過程で多くの当時の映画館のメンバーにお会いすることもでき、映画館を影で支えた人々の写真や苦労話についても紹介する予定です。

## 学芸員のノートから⑨

### 仏像の時代判定をめぐる話（自戒をこめて）

日本彫刻史を専攻している筆者にとつてありがたいことに、天津を中心とする滋賀の地は古像の宝庫である。この地に守り伝えられてきた彫像の調査にたずさわるとなるとまだ十数年にすぎないが、それでも今日まで数多くの寺社を訪問し、数多くの作品に出会うことができた。一日調査に出て、古代・中世にさかのぼる像に一体もめぐりあわないことはほとんどない気がする。これはおそらく、他府県、とくに近畿圏以外の土地では考えられない幸運かもしれない。

ところで、ときおり作品の制作年代をどのように見わけるといふ質問を頂戴する。いうまでもなく、像自体、あるいは納入品等の銘記によつて、その作品の来歴が定かになることはきわめてまれである。大半の場合、その形式や作風、制作技法などを調べ、これまでの研究により年代の確定できる作品と比較することによつてその前後関係を考え、時代を判断するのである。だから基準作例の豊富な時代であればときに十年単位での判断も可能だし、そうでない場合には百年単位でしかできないということにもなる。

このような方法による以上、研究者によつてその判定結果に差が出るということもやむをえないだろう。あるいは同じ人間であっても、のちに考えが変わる場合もある。かくいふ筆者など、自慢ではないがそのようなことはなほ多い。いかに経験浅い未熟者とはいえ、少しでも減らしていかなければならないと自戒

する今日この頃ではある。

平成九年春、筆者が担当者となつて開催された「大津の仏像」展に出品していただいた金台院の木造阿弥陀如来坐像は、一見して顕著な定朝様をしめす作品だが、像内に寛文七年（一六六七）に大仏師民部法印宗貞によつて「再興」された旨の墨書銘がある。本像については、平成七年に発刊された『大津市歴史博物館研究紀要』第三号に掲載した研究ノート「大津所在の通肩阿弥陀彫像二例」において、平安時代後期の作であり、寛文七年の墨書は修理銘という解釈を提示した。しかし上記展覧会の会期中、米館された複数の研究者から疑問の声をいただき、筆者自身も再度調査ならびに再考の結果、本像は寛文七年に何か由緒のある古像を復興するという意味で「再興」されたもの、すなわち寛文七年の制作であるという考えに落ちついた。おそらくは失われた古像が定朝様に基づく平安時代後期の尊像であつたのだろう。したがつて著しい判断ミスをお犯したことになるが、しかし像そのものは、作者および制作期の両方がわかる江戸時代前期の貴重な基準作例となり、文化財としての価値はかえつて高まつたといえるのではないかと思う。いずれ機会をみて、この間の経緯についてももう少し詳しく報告してみたいと考えている。

またこれは観音霊場として名の聞こえた或る京都府下の寺院でのこと。別の場所での調査を終えた後、たまたま訪れたこの寺院において平安時代前期の作ではないかと思われる見事な文殊菩薩坐像に邂逅した。幸い調査の許可はすぐにとりつけたので、プロカメラマンの同道を願い、調査と写真撮影を終えた。当初の判断にそつて、平安時代前期の彫刻として調査を書き、

お寺にも提出した。ところがその後、できあがつた写真をながめているうち、何ともいえぬ不安な気持ちに襲われはじめたのである。いったん疑いの目で見えずと、像底の輪郭が気になる。細部の表現に時代的な統一がないことに思いあたる。そこで幾人かの著名な学者に写真をお目につけた。結果、やはりこの像は×印を捺さざるをえないという結論に達した次第。要するに、近代以降のある時期に、古像をまねて造られたものだという判断である。その後ある筋からうかがうと、この像は美術商からの購入品であり、寺に伝来したものではなかつた由である。しかし一度提出した調査を回収する術はない。生涯の汚点と思うが、どうしようもないのである（もつとも、汚点は他にも星屑のごとくまきちらしている）。

これは逆に幸せなケース。琵琶湖岸に近い中主町吉川の安楽寺の本尊聖観音像（写真）の調査をおこなつたことがある。その節の調査をみると、頭部は鎌倉時代、体部は江戸時代の作と記しており、おそらくその線にそつて作成した調査をお寺へ届けたはずである。調査に赴いたのは十年近く前のことで、正直いつてこの像の記憶もうすれかけていた頃、守山市・幸津川の東光寺住職川本哲斎師より、東光寺の歴史に関する冊子を作るので、東光寺と師が住職を兼務されている安楽寺の仏像についての解説文を書くようにとの依頼があつた。そこであらためて調査ノートを本棚から引っ張りだし、保管していた写真をながめてみた。このときの気分は正直いつて憂鬱なものである。「またやつたかな」という気持であつた。写真からは、頭部についても江戸時代の作のように見えたのである。ともあれ、あまりいい写真の出来でもなかつたので、再



安楽寺・聖観音像(頭部)

度の撮影をお願いし、安楽寺を再訪した。結果、幸いにも、以前の調査時の見解は正しかったという判断にいたったのである。丈高い宝髻を結び、花飾りのある美しい天冠台をつけており、玉眼をいれた涼しげな目もと、適度な抑揚のある頬の肉取りなど、なかなか優れた造形である。どうやら後補された鼻が、全体の印象を若干悪くしていたようであった。くわえて、当初のものともみられる宝冠や冠帯は革製であり、類例まれば貴重な遺品であると判断されたのである。東光寺から刊行された冊子に、本像の写真が掲載されたのはいうまでもない。

能力差はもちろんあるだろうが、やはり経験の多寡は大きくものをいうはずである。今後もちこちで判断ミスを犯し、諸方面にご迷惑をおかけすることは思うが、あえてそれを恐れず、調査をつづけてゆきたい。そのことによって、筆者の時代判定の精度も上がってゆくと考えるが、甘えであろうか。(岩田 茂樹)

## 『図説大津市史』だより③

現在、大津市史編さん室では、平成11年10月の刊行を目指して『図説大津市史』の編さんを進めています。が、「歴博だより」や「広報おつ」を通じて資料の提供をお願いしたところ、多くの情報を寄せていただき、有り難うございました。ここで、その成果の一部を紹介させていただきます。

写真は、杉浦町在住の田中賢一さんから提供いただいた、現在の京阪膳所駅から石場駅に向かう京阪電車の写真です。手前が京阪膳所駅、向こうが石場駅になります。京阪電車石山坂本線(石坂線)は、昭和2年(一九二七)琵琶湖鉄道汽船として全通し、昭和4年の同社の解消と鉄道部門の京阪電鉄への合併によって成立しました。

写真の撮影は昭和15年(一九四〇)で、車両は4輪の90型と呼ばれるものです。この車両は、現在の阪急千里線の前身にあたる北大阪急行を走っていた電動無蓋貨車を客車に改良したもので、この年から石坂線に使用されるようになりました。

電車の中には、帽子を被った乗客や、窓から顔を出し乗客の姿が見られます。行先方向に瓦葺きの屋根が見えるあたりが、石場の集落になります。のどかな田園の中を走っているという情景ですが、人家が立て込み、湖岸沿いの埋立地にビルが立ち並ぶ現在の光景からは想像もつきません。

平成9年10月12日、京都市営地下鉄東西線が開通し、京阪電車大津線は京都市役所と浜大津を結んで4両編成の車両が運行するようになりました。これに合わせ

て、石坂線の穴太・坂本間の単線区間が複線に復旧され、従来にも増して利用者の便が図られるようになりました。石坂線の沿線は、今後ますます大きな変貌をとりていくことになるでしょう。

今回刊行を計画している『図説大津市史』は、絵や写真で大津の歴史を語ろうというものですが、明治以後に重点を置いた編集を心掛けています。そのためには、図版としての写真は欠かすことのできないものです。市史編さん室では、引き続き資料調査を進めてまいりますので、今回紹介したような、地域の移り変わりを示すような身近な資料の情報をお待ちしております。

なお、前号の『図説大津市史』だより

②で、商店街の形成について「堅田では東洋レーヨンの建設が大きな役割を果たしていましたが、「石山」の誤りでした。読んでお詫びします。



### ※連絡先

大津市歴史博物館内市史編さん室  
☎〇七七―五二二―六―七三(直通)

れきはくインフォメーション

<p>7 第15回土曜講座 大津の映画館 展示品解説</p> <p>土 市川崑、朝日劇場、大津キネマ、大津座、映画全盛時代、大津市内にはたくさんのおもちゃ屋がありました。童謡や交響、無声映画からトーキーへ、懐かしい映画のチラシやパンフレット、当時の写真などゆかりの品々で、大津の映画の足跡をたどります。 13時30分～15時 講師 橋川 修 (本館学芸員)</p>	
<p>14 第54回親子歴史講座 紙でハニワ模型を作る</p> <p>土 焼物は古墳から出土する素焼きの土製品です。古墳の頂や壁に並べて配置され、死者をまつ祭祀に関係するものと考えられています。比較的単純な形の田舎道輪を始め、家動物、人を型どった形象埴輪があり、今回は形象埴輪「飾り馬」の紙粘土を作ります。 10時30分～12時 講師 松浦俊和・山崎和宏 (本館学芸員)</p>	
<p>14 大津の映画特別講座 映画上映会「伊豆の踊子」</p> <p>土 川端康成の同名小説の初の映画化。監督五所重之助の愛情あふれる演出と純情の橋本和子主演の演技は、不朽の名作として今も語り伝えられています。本作は無声映画ですが、音声を併せて入っており、当時の井土のいる映画が再現されています。 13時30分～15時</p>	
<p>21 大津の映画特別講座 映画上映会「類猿人ターザン」</p> <p>土 おなじみのターザン映画です。本作主演の6代目ターザン、ロイズミューラーは、折からのトーキー映画の登場で、彼の叫び声が集め、誰も長くターザン役をつとめました。 13時30分～15時</p>	
<p>28 大津の映画特別講座 映画上映会「鞍馬天狗―黄金地獄」</p> <p>土 風雲剣道の十八番「鞍馬天狗」シリーズの「編」です。今回上映の黄金地獄には、古い大津の風情が登場します。 13時30分～15時</p>	
<p>14 第55回親子歴史講座 和装本の作り方II</p> <p>土 紙を作る技術は？世紀初めに中国から伝えられました。以来、製本方法の歴史は中国と同様の変遷をたどり、巻子装から折本、糊を使った厚紙装や和装装を経て、14世紀頃には東洋型製本の代表ともいわれる膠装が登場します。本講座では、これらのうち産つつかの作り方を紹介する予定です。 13時30分～15時 講師 山崎和宏 (本館学芸員)</p>	
<p>28 大津歴史教室 里坊の町坂本をめぐる</p> <p>土 高坂坂本駅 (集合) 生遊寺 善慶院 実盛坊 雙龍院 滋賀院 蘇原堂 迦陵仙逝の陣門 (現地解散) 里坊は比叡山の麓に「里坊」をめぐって住まうために建てられた里の陣。その里坊の歴史を中心に、坂本の歴史を解説します。諸般の事情により、コースは変更されることがあります。 13時～17時</p>	

第7回特別陳列 「大津の映画館」  
2月3日(火)～3月1日(日)

収蔵品紹介 30

雨乞神事行列図

尾花川親友会所蔵

旧大津町の北端に位置する尾花川には、近世後期の雨乞いの記録が残されています。雨乞いは、日照りの年に行われますが、宝暦十年(一七六〇)から寛政六年(一七九四)までの間に七回の雨乞いが記録されており、山が浅く小河川に頼る灌漑であったこのあたりの厳しい状況が伝わっています。雨乞いは、神社などに籠もって降雨を祈願し、やがて願いがかなうとその返礼としてその喜びを神に捧げました。この雨乞神事行列図も、降雨に喜ぶ人々を表現したもので、時代は不詳。行列の題材は、龍宮城を表わしています。先頭に「出作中、尾花川町」とあり、尾花川はじめ観音寺町・北保町・大門町・鹿岡町など旧大津町の住人は、唐崎あたりまでの湖岸の水田を所有し出作りを行っており、その内尾花川の行列を描いたものです。子供や娘の提灯に続き龍宮の篇額、そして頭に鯛やヒラメの作り物を被り手に供物を持った神姿の人物が続き、大きな龍の作り物、そして龍宮の屋台という構成です。屋台の上では龍宮の楼門を背景に波の上を跳ねる魚たちの様子が表されており、雨乞いの返礼とはいえ相当な規模の行事だったことが伺われます。臨時の祭礼にこれだけのエネルギーが注がれるのも、降雨の喜びがいかに大きかったか、その気持ちを今に伝えています。

(和田 光生)

